

令和4年度の北海道地区スモン検診結果

新野 正明 (国立病院機構北海道医療センター臨床研究部)
矢部 一郎 (北海道大学医学研究院神経内科学)
濱田 晋輔 (北海道脳神経内科病院医務部)
津坂 和文 (釧路労災病院神経内科)
川島 淳 (さっぽろ神経内科病院脳神経内科)
丸尾 泰則 (亀田病院脳神経内科)
松本 昭久 (溪仁会定山溪病院脳神経内科)
笠原 敏史 (北海道大学保健科学研究院リハビリテーション科学分野)
遠藤 篤也 (北海道保健福祉部健康安全局地域保健課)
稲垣 恵子 (北海道スモンの会)
川戸美由紀 (藤田医科大学医学部衛生学講座)

研究要旨

令和4年度当初に把握していた北海道内のスモン患者は40名で、うち3名は検診を希望されなかった。今年度も、COVID-19パンデミックの影響により、検診はかなり制限を受けることとなり、特に集団検診は一カ所も開くことができなかった。しかし、北海道保健福祉部健康安全局地域保健課及び北海道スモンの会の多大なご協力のおかげで、対面での検診を27名、ADL及び介護に関する現状調査のみを10名で行うことができた。スモン患者は年々高齢化し、ADLは低下してきており、COVID-19感染には十分注意を払う必要があるが、スモン患者の現状を的確に把握するためには、年ごとの調査が重要であり、継続の意義を再確認した。

A. 研究目的

令和4年度の北海道地区のスモン検診を行い、その結果から、北海道のスモン患者の現況を明らかにする。また、これまでの結果との比較を行うことで、スモン患者の状況の推移を把握する。一方、新型コロナウイルス感染が蔓延している状況下での、検診の意義も検討する。

B. 研究方法

令和4年度も昨年度同様、COVID-19パンデミック前と同じように検診を行うことは困難であった。今年度も、研究班員または研究協力者が常勤あるいは非常勤で勤務している病院での検診を中心にしたが、一方

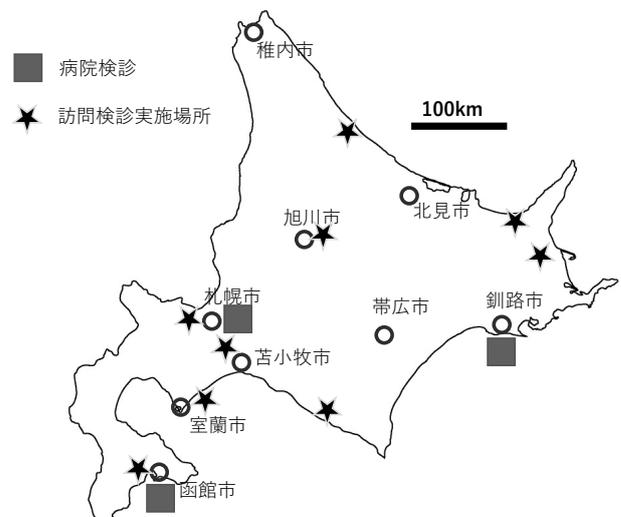


図1 令和4年度 北海道地区スモン検診地域

で訪問検診も積極的に行った（図1）。集団検診は検討したものの、COVID-19感染状況から今年度も断念した。一方、検診を行えなかった患者の一部において、北海道スモンの会のご協力により、ADL及び介護に関する現状調査を電話で施行していただいた。昨年度同様、一昨年度までの検診データとの経時的な単純な比較は難しいが、どのような傾向があるかを検討した。（倫理面への配慮）

本研究は、当院の倫理審査委員会の承認後に行った。データに関しては、患者ないし代諾者から署名ないし口頭で同意を得たもののみを使用した。

C. 研究結果

令和4年度当初の患者数は40名で、昨年度より5名減少した。今年度もCOVID-19パンデミックの影響により集団検診は実施できなかった。40名のうち、3名は検診を希望されなかったが、希望者の中でも対面での調査を希望されず、代わりに、ADL、及び介護に関する現状調査のみを希望された方もいた。計37名の方が、対面での検診か現状調査を受けることが出

来、昨年度よりも受診数が増加した（図2）。37名中、27名は対面で行い（病院での検診13名、自宅訪問7名）、入所ないし入院施設訪問7名）、現状調査のみは10名であった（図3）。調査実施にあたっては、北海道保健福祉部健康安全局地域保健課難病対策係のご協力により、患者一人一人への意向調査、そして、現状調査のみの方の問い合わせには北海道スモンの会の多大な協力を得た。

検診並びに現状調査を行った37名の内訳は、男性6名・女性31名、年齢は、50～64歳1名・65～74歳6名・75歳～84歳12名・85～94歳16名・95歳以上2

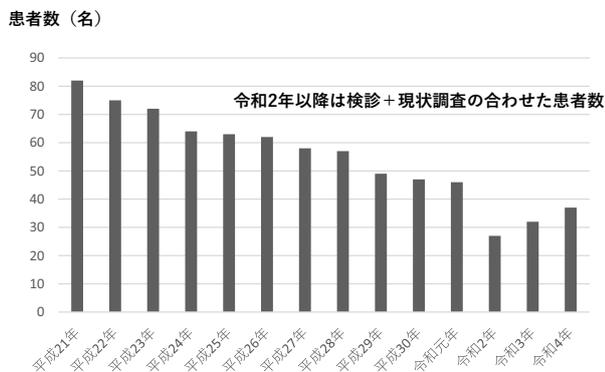


図2 検診患者数の推移

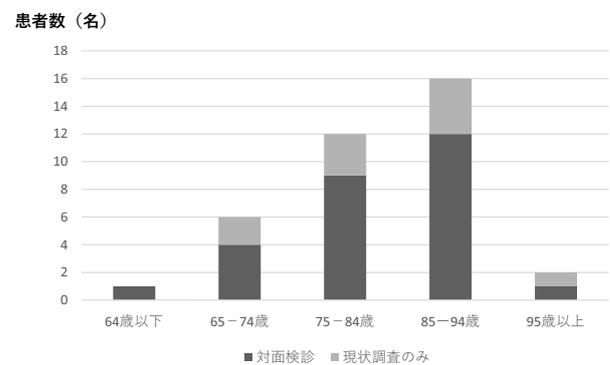


図4 令和4年度の年齢別の検診者数

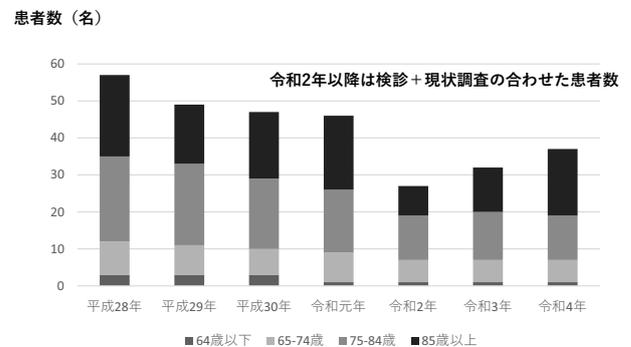


図5 年齢別の検診者数の推移

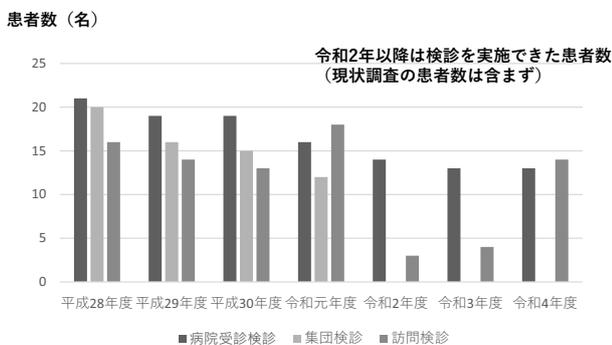


図3 病院受診検診・集団検診・訪問検診数の推移

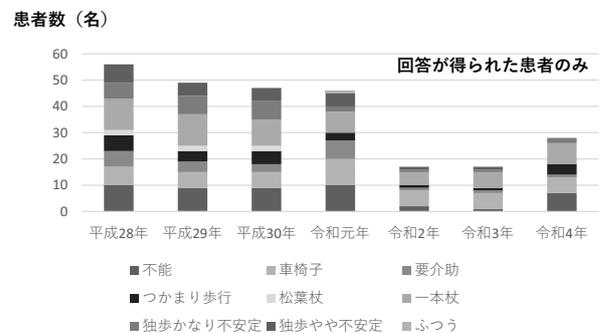


図6 歩行障害の推移

患者数 (名) (n=37)

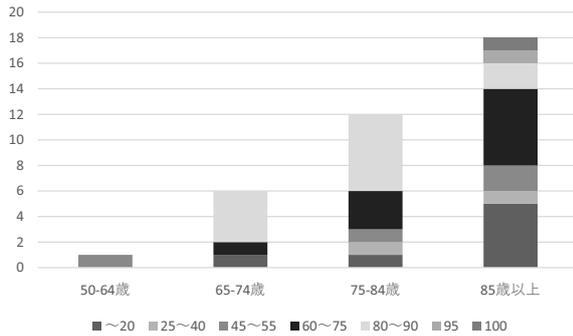


図7 令和4年度のBarthel Index

患者数 (名) N=36 (無回答1)

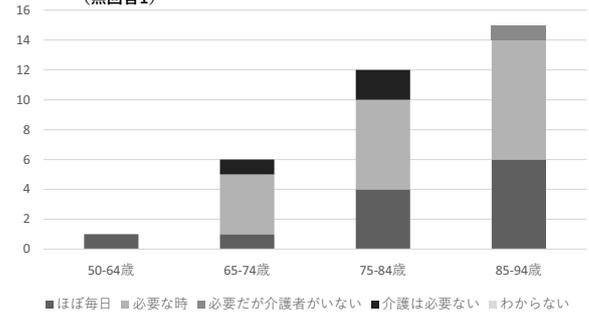


図10 令和4年度 日常生活での介護が必要かどうか？

患者数 (名)

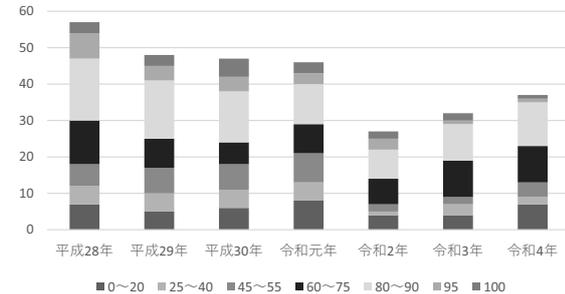


図8 Barthel Index の推移

患者数 (名) N=26 (無回答11)

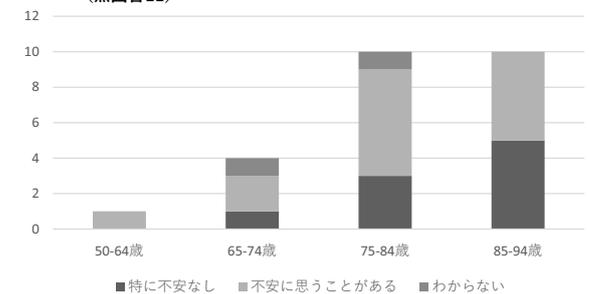


図11 令和4年度 今および今後の介護に関する不安

患者数 (名) N=21

(15名は介護保険を申請せず、1名は区分がわからず)

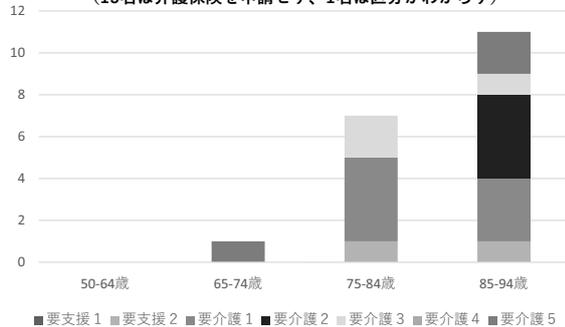


図9 令和4年度の介護保険申請者の認定区分

名であった。(図4)。検診並びに現状調査を行った患者の年齢構成の傾向を図に示すが、当然であるが、高齢患者の割合が増加している(図5)。

歩行状態については、不能7名・車椅子6名・要介助が1名・つかまり歩き4名・一本杖が8名・独歩(かなり不安定)2名、独歩(やや不安定)なしで、無回答が9名あった(図6)。Barthel Indexについては、20点以下が7名・25~40点が3名・45~55点が3名・60~75点が10名・80~90点が12名・95点が1名・100点が1名であった(図7)。Barthel Indexを

集計できた数が異なるため、これまでのデータと単純な比較は出来ないが、今年度はBarthel Indexが60点以上の方がやや多い傾向があった(図8)。介護保険申請者の認定区分としては、得られた数が少ないものの、分散している傾向が見て取れた(図9)。日常生活での介護が必要かどうかに関しては、大多数の患者においてほぼ毎日、ないし毎日ではないにしてもかなり必要という状態であった(図10)。このような状況を反映してか、現在および今後の介護に関して不安に思う方が多い傾向であった(図11)。

D. 考察

北海道では昭和56年度からスモン検診が開始され、公益財団法人北海道スモン基金の全面的な協力により高い検診率を維持してきたが、北海道スモン基金は解散したため、検診業務の協力体制が必要となった。幸い、北海道では、北海道保健福祉部健康安全局地域保健課及び北海道スモンの会から大きな協力を得ることが出来、検診を希望されない方を除き、全員から何らかの調査を行うことが出来た。

北海道では広域に患者が点在しているものの、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、検診が十分に行えない状況が続いており、特に地方在住者の検診がほとんど施行できていない。今年度のデータに関しては、昨年度との比較はしやすいが、それ以前の検診データとの比較が難しい。コロナ終息後は、この間の調査が不十分だった患者の状況把握が大事だと思われる。

北海道でもスモン患者数は年々減少しており、さらに高齢化している。葉害であるスモンに関しては、長期にわたる調査から得られるデータの解析、そしてそれの患者への還元が必要である。当研究班北海道地区では、検診業務を通じて少しでもスモン患者の状況把握とサポートに今後も寄与していきたいと考えている。

E. 結論

COVID-19 感染が続く令和 4 年度のスモン検診結果をまとめた。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

なし